

白鳳展を終えて

当館学芸部情報サービスマスター 岩井 共一

開館一二〇年記念特別展「白鳳―花ひらく仏教美術―」は、今年七月十八日に開幕し、九月二十三日をもって閉幕した。奈良国立博物館一二〇年の歴史の節目に開催された記念すべき大展覧会に関われたことを、非常に光栄に思う。

今回の展覧会では、大きさや保存状態の関係で、会場への輸送・陳列がほぼ不可能なものや、東北・北陸や離島などの遠隔地に所在するものを除いて、金銅仏、木彫像、塑像、埴仏、金工品、染織品、書跡、瓦などの考古資料、文献史料といった、白鳳時代の主立った文化財を網羅的に出陳することが出来た。自画自賛で恐縮だが、文字通り空前絶後の白鳳展となったことは間違いない。

展覧会では、全国各地のご所蔵者から貴重な文化財を借用させていただいた。多くのご所蔵者のご理解とご協力のおかげで開催できたことに感謝している。同時に、奈良博一二〇年の歴史の中で当館の諸先輩たちが築き上げた研究の蓄積と信頼があったからこそ、多くのご所蔵者にご快諾いただき、これだけの文化財を一室に会した展覧会を開催出来たのだと肌で感じている。



国宝 月光菩薩立像(薬師寺) 白鳳展会場にて

この展覧会の企画に彫刻担当として参加して感じたことは、白鳳時代は「一筋縄ではないかない」という事であった。飛鳥時代(七世紀前半)から奈良時代(八世紀)までの仏像の様式変遷は、ギリシア彫刻の様式変遷になぞらえて、古拙から古典の完成へという流れで説明されることがある。そこでは、白鳳時代の様式は「過渡期」の様式と位置づけられる。そのこと自体は誤りとは言えないが、ともすると、白鳳時代の金銅仏などを形容する「若々しい」「瑞々しい」「可愛らしい」という言葉が「未熟な」「発展途上」「稚拙な」という意味にとられ、相対的に白鳳美術の評価は低く貶められていたのではないだろうか。

本展には薬師寺金堂の月光菩薩立像が出陳された。この像は白鳳説と、天平説とがある。本展では、文献史料や様式の検討から白鳳時代に位置づけたが、高度に完成された写実性を持つこの像を白鳳展に出陳するということは、白鳳時代を古典以前の様式とする位置づけへのアンチテーゼでもあったように思う。

白鳳仏は、古拙から古典へという一本の直線の上きれいに編年して並べることが出来ないものであった。写実性が高いものほど新しいとは必ずしも言いがたい。中国や朝鮮半島から渡ってきた新旧様式の複合化した様式もあっただろうし、遣唐使が持ち帰った唐代の最新様式もあっただろう。制作者も色々で、中央と地方のレベル格差も大きかっただろう。白鳳は一筋縄では語れないのである。

担当していても、わからないことだらけであった。しかし、一堂に会して見ること、新たな視点も浮かび上がってくるだろう。近年使われなくなってきた「白鳳」という言葉が今後どう扱われるのかも含めて、この展覧会の意義が問われるのは、これからである。

【表紙写真解説】

正倉院宝物 密陀絵龍虎形漆櫃

一合 正倉院宝物 南倉
縦六五・八cm 横一〇六・〇cm 総高四六・三cm

スギ材製の唐櫃。内面は赤漆仕上げで、外面は黒漆を塗り、白色顔料で文様を描き、さらにその上に油を塗って保護する、油色と呼ばれる密陀絵の一種の技法を用いて、壮快な意匠を表している。

蓋表は激しく流動する雲の中に、獅子に似る靈獣を三頭配する。身の長側面には三箇の輪が横に並ぶようにして湾曲する唐草文を描き出し、中央の花の上に靈獣を坐らせ、短側面は唐草の中に鳥獣を組み合わせる。このような円環をなす唐草文に鳥獣を組み合わせる図像は、中国・唐代に流行し、わが国にも多くもたらされた「海獸葡萄鏡」と呼ばれる鏡にもみられる。鏡を飾った図像が唐櫃に見出せ、かつそれが自由闊達な運筆で描き出される点が興味深い。田澤 梓(当館学芸部研究員)

